

# 歩きなさいよ

事故で左脚を失った。ジンジンとさめてくる麻酔の中で、ただ考えた。「心臓、腎臓が移植できるんだ、脚だって」

朝、先生に訴えたが、あつさり「義足があるよ」と言われた。義足！ 反射的に戦後すぐ、上野公園で見掛けた白衣の勇士の群れが浮かんだ。黒い鉄脚を剥き出してガツチャン、ガツチャンと音が歩いていった。「アレかよ、アレを俺がかよ」。布団をめくると、ブッタ切った大根のような脚の残りに涙した。

義足を付けに湯河原の病院に転院し、初診の時、もう一度と高橋先生に移植の可否を聞いてみた。先生はじつと私の顔を見詰めていたが「今、僕にできるのは義足を合わせることだ」と静かに言った。傍らに立っていた小さい看護婦さん、マツちゃんが、顎をちよつとしゃくりながら小さくうなずいた。ボンヤリ部屋に戻っていた。「やはり駄目か。義足でどう生きられる？」頭の中が渦巻いた。

その夜、マツちゃんが義足を持って現われた。ジュラルミンが光った。

「これ一番新しい義足よ、ちよつと持つてみて」。意外に軽かった。音もしなかった。「これでまず歩きなさいよ。歩いてから考えなさいよ、これがあなたの脚なのよ」

パツと頭の中が開けた。「そうだ、歩きに来たんだ」。当たり前のことだ、もう迷いはない。マツちゃんの言う通り、毎日決めた道を歩いた。昼食後すぐ病院の裏の山路を2時間、ゆつくり登る。右手に十国峠の山肌、左手はるかに真鶴岬と、さらに沖の水平線、空と海の碧さを吸いながら10分間休憩。帰りは険しい石ころ路。歩みごとに突き上げる痛さに耐えて「痛い分だけ早く歩けるわよ」のマツちゃんの言葉を飲み込んで降りる。希望があった。

そして50年、何とか歩いて来た、イヤ、歩いたのである。苦渋の時はあの水平線とマツちゃんの「歩きなさいよ」の声と微笑を思い浮かべて乗り越えられた。深謝している。

【神奈川県・印南房吉】

★  
一般部門  
入選